

宗教と教育

—人間性の回復を求めて—

発刊にあたって

真宗大谷派学校連合会は、宗祖親鸞聖人によって開顕かいけんされた浄土真宗の教えを建学の精神とし、それに基づく人間教育を実践している真宗大谷派関係の学校が、相互に緊密な連携を保ち、自らの建学の精神を確かめ、研鑽けんざんに励み努めることを願いとして、一九六五（昭和四十）年に結成され、二〇一五（平成二十七）年に結成五十周年という大きな節目を迎えた。これまで、結成二十周年、三十周年の記念に、『人間性の回復を求めて―真宗と教育―』、『いのちを見つめて―続・人間性の回復を求めて―』が東本願寺より刊行された。そのような経緯を受けて、このたび五十周年の記念事業のひとつとして、『宗教と教育―人間性の回復を求めて―』を発刊することである。

時代を問わず、人間の生きるうえでの急務は、「人間性の回復」に他ならない。戦後の日本社会は、ひとえに経済合理主義を旗印に、理性や知性を絶対とし、人間の思い通りになる世界を理想として突き進んできた。それは教育現場も例外ではない。たしかに物質的に生活は豊かで便利になったが、その陰で、人間の尊厳性や、私たちの本

当の満足が何かという問いは見失われていくばかりである。

ここにおいて、私たちはいよいよ「宗教教育」の意義を確認せねばならない。宗教に立つ教育とは、人間のあり方そのものを問い、人間の自我（エゴ）に真摯に向かいつつ、人間の根源的な欲求を満たそうとする教育実践である。その意味で宗教教育とは、決して一宗一派のための教育ではなく、現代を生きるすべての人に開かれた公教育と言えらるだろう。

本書は、二〇一五年から遡って過去二十年間に行われた当連合会諸研修から「宗教教育」をテーマとした講義録を選びめぐり、その内容を広く共有すべく書籍化するものである。本書が、共に真の人間教育のあり方を問い学んでいく機縁となることを切に願うばかりである。

最後に、本書の発刊にあたり快くご承諾をいただいた先生方、ならびにご遺族の方々に深甚の謝意を表したい。

真宗大谷派学校連合会会長

草野 顕 之

目次

教育における根・幹・枝葉	7
宗教と教育	36
いのちは本当に尊いのか？	60
教育可能の限界	97
理性の教育・感性の教育	138

教育における根・幹・枝葉

はじめに

九州大谷短期大学名誉教授 宮城 顕

表題として出しました「根・幹・枝葉」という言葉は、何年前になりますか、本願寺派の保育研修会が鹿児島であり、そこに出席させていただいた際に、お聞きしたのだと思います。人間が学校で学ぶ最初は、保育園・幼稚園での、いわゆる幼児教育です。そして小学校からの義務教育を受け、さらに、その上は高等教育、専門教育となります。教育は、このように三つの段階に分けられるとされ、その最初の幼児教育は、人間にとって、人間としての「根」を養育するものであり、義務教育は、人間としての「幹」を大きく、たくましく育てることが願われ、そして専門教育は、その根と幹の上に大きく枝を張る「枝葉」の教育だということをおっしゃっていました。私には

凡例

- 一、本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。
- 一、内容および著者の肩書きは、講演当時のものです。

そのことが非常に印象に残りました。ただ、その時には、何をもって「根」とするか、何をもって「幹」とするのかということにはふれられませんでしたので、お聞きした私のほうで、どう押さえることができるだろうかと考えさせられたのでした。

根—人間としての常識—

人間にとって、その「根」とはいったい何なのでしょう。人間形成の上でいちばん根っこになるものは何かという問題であります。これにつきましては、ご承知のように、古来、精神の働きを「知・情・意」という三つの分野で押さえることがありますが、そのことと重ね、私は、「根」とは人間としての常識ではないかと思うのです。このことに関連するのですが、小学校六年生になりますと、子どもが非常に荒れることがあります。一時、新聞などに「高学年」を荒れる学年という意味の「荒学年」と表記したりしておりました。五年生までは非常に良い生徒で、クラスをまとめ、先生の手助けもした子が、六年生になって急に荒れ出した例がいくつか報道されたこと

がありました。その一つに、五年まで優秀だったA君が、六年になって乱暴をするようになり、落ち着きがなくなって全く授業に参加しなくなり、クラスの中にいた知的障がいを持つ子をいじめめるようになったという例がありました。その様子が目に余ったので、先生がA君に「君は弱い人間の気持ちかわからないのか」と聞いたのだそうです。するとA君は下を向いてぼそっと「わからん」と言ったのです。新聞には、その先生が「その言葉を聞いた時、妙な話だけれども、何か納得するものがあった」とコメントされたと載っておりまして。そしてさらに、知的レベルを上げていけば、それにもなって自然と常識も身につくと思っていたが、それは間違いであることとを教えられたとおっしゃっていました。つまりそれは、知的レベルが上がることと、人間としての常識が身に付くこととは決してイコールでないと断言しておられたのです。

そこでは常識という言葉を使っておられましたので、あらためて常識という言葉が気になり辞書をひいてみました。辞書では、専門的な知力ではなく、人間が一般に持っているべき、また持っているはずの知力という言葉で一貫して定義されています、

これにはちよつと驚きました。ご承知のように、常識はコモンセンスだとされてい
ます。そうしますと常識はセンス、感覚の問題ということになります。そこで、また別
の辞書をひいてみましたら、そこには「共通感覚」という言葉が出ておりました。共
通感覚という言葉はコモンセンスの直訳でしょうか、人間ならばこういうことはこう
感じ、みんな同じように感覚するという共通感覚という言葉が出されていたのです。
考えてみますと、この感覚という問題、今日いろいろな形で現われております人間と
しての感覚というものは、全く共通したものでなくなつてきているのではないかと思
われます。

「共に」という感覚

二〇〇一年二月二十六日の朝日新聞の朝刊に、はるかようこ遙洋子というタレントさんとおにぎわけい鬼沢慶
いち一という芸能レポーターが、「電車のなかで化粧どう思いますか」というテーマで対談
しておられたのが出ておりました。鬼沢さんは昭和一桁生まれですから、若い女の

が電車の中で平気で化粧をしているのは、目のやり場にも困るし、不愉快だと言われ、
羞恥心という言葉は、現代ではもはや死語になつてしまったのかと言われていました。
それに対して遙さんは、「基本的に周りの方を人とは思っていません。好きな人の前で
は化粧をしたりせず、会う前に完成させておきたい。でも、その途中で会う人は自分
の人生に何の関係もない、風景のような、意識外のものなのです」と答えておられま
した。そして、「恥じらいはあるのですよ。私も鬼沢さんにお会いする前に、化粧を終
えてきました。これは恥じらいと敬意なのです」と言われるのです。要するに、関係
のない人は全く人格として見ないということなのです。そしてさらに、「公の空間であ
るから常に公を意識して振る舞わなければならないという考え方と、公の中に個人の
空間があつてもいいという、こちら側の要求との間にずれがあります。最近、おしゃ
れなカフェがはやっていきますよね。化粧しても本を読んでもフリーなのです。み
んなそういう空間が欲しかったのです。だから、暗黙の了解でつくつている個人の空
間をジロジロ見るほうこそマナー違反なのです」と言われているのです。つまり、同
じ電車に乗っているのだけれども、それぞれが自分の空間を持って自由に行動してい

るのであって、それを見て、顔をしかめたり、なんだかんだと言うほうがマナー違反だと言われるのです。こういう発言を聞きますと、人間としての感覚が、私などの感覚とは違うといいますが、合わないのです。人間というものがどうなっていくのかかと思ったりします。確かにそのような喫茶店は、そのために作られた空間だと言えますが、電車の中は違うのではないかと思うのです。

また、別の新聞ですが、「ポータブル・テリトリー」という言葉があるという記事が出ておりました。どこへでも携帯していくテリトリーということでしょう。電車の中でもテリトリーを作って、そこでは自由に振る舞うのです。自分の部屋で友だちと話をしているのと同じ雰囲気なのです。大学でも階段や廊下にへたり込んで仲間と話をしております。全く周りの目などは無関係で、自分たちだけの空間を楽しんでいるということがあります。ですから、電車の中で人から注意されて、暴力を振るうということも、注意されたことに対する反発というものではなく、そのようなテリトリーへなぜ闖入ちんにゅうしてくるのだという、闖入者を追い払うという感覚からのようです。「俺たちは俺たちのテリトリーの中で自由にやっているのに、何を口出しするのか」と、それ

こそ鮎あゆが自分のテリトリーに入ってきた他の鮎を追い出す行動と少しも違わないような、動物的な反応なのです。その点については、現在の教育が、人間として共に考え、共に育てていくということについて、全くとは言わないにしても、非常になおざりにされてきたのではないかと、あらためて思われるのです。

偏った学び

哲学者の西谷啓治にしいたけいじ先生の『宗教と非宗教の間』という本が、岩波書店の「岩波現代文庫」の中にあります。そこでは、現在の学びというものは科学的な認識方法に根があるわけで、本来の学びは「客体についての究明と主体の自己究明が切り離せない一つのものであるような」、そういった知の次元であるはずなのに、「そういう知の次元が閉ざされて来た」とされ、「或る事柄を会得するその知が、会得の過程において、同時に、知る自己自身をも内から変えて行く」というところに本来の学びがあるはずだとされています。つまり、外のいろいろなことを知っていくということは、そのまま

自分自身が変革されていく、変えられていくということ、そういうことが本来の学びの世界であるはずなのだということです。ところが今日、その科学的な「知」のように、ただ外にばかり向いていて、いろいろなことを知っていくことが、自分が人間として生きるということにつながってこないのです。つまり、「知・情・意」の「情・意」と無関係な「知」の蓄積ということになっているのです。

こういう問題は、たとえばオウム真理教の幹部になっていた若者たちに見ることができません。あの若者たちは、まさに知的エリートです。最高学府の理数系を卒業した知的エリートたちだったのです。ですから、あの事件の時には、あのようなエリートたちが、なぜあのような宗教に入ったのだろうかということが、いろいろと取り沙汰されていきました。それはおそらく、この「情・意」と切り離された人格・人間として生きていき、さらに、全体と切り離された知的な学びや、何かについての知識を増やしていくだけの学びになっていたからなのではないでしょうか。彼らの場合、どういう事情があったかわかりませんが、何か生きることにも迷った時、今までの学びが何の力にもならなかったのでしょうか。そういう時に、どういう縁があったのかはそれぞれ

でしょうが、麻原氏とつながりができ、その麻原氏は、どのような人生の問題を出しても、即答してくれたのでした。彼らが麻原氏について、共通して言っていたのは、その即答性なのです。「尊師はどんな問題でも即答してくれた」と、そのことに心惹かれたのです。しかし、これはやはり、外からの知識で支えようということにして、そこには問い直すという眼は育っていませんから、今度は麻原氏の言葉一辺倒になって、その言葉通りに行動する自分を問い直すという力はなかったのです。

一方、その世界から落ちこぼれた者は、「情・意」の世界だけに生きることになります。西谷先生の言葉に戻りますと、

その傾向の由来するところは、前にも言ったように、科学に代表されているような客観知が人生を支配していることである。いま言った傾向は、特にいわゆる知識人の「知性」に一般的な傾向である。その知性の求める合理性は、情意から切り離された、抽象的な、科学的合理性である。その知は高い全人的な統一点に成立する知ではない。そういう統一点のない場合、知も情も意志も、人間の内で、ばらばらに動き、特に知との結びつきを失った情意は低迷したり暴発したりしな